

子どものコミュニケーション能力育成のための メディア活用

ー 社会科プレゼンテーション大会の実践 ー

京都教育大学大学院 連合教職実践研究科
教職実践専攻 授業力高度化コース
156019 堀井 友絵

子どものコミュニケーション能力育成のためのメディア活用 —社会科プレゼンテーション大会の実践—

堀井 友絵

授業力高度化コース

要約：研究の目的は、子どものコミュニケーション能力の育成である。本研究では、とりわけ「伝えたい」という意欲を引き出し、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度に着目している。小学校第5学年社会科「低い土地の暮らし 岐阜県海津市」という単元において、海津市プレゼンテーション大会という学習活動を盛り込んだ授業を実践した。電子黒板と黒板の活用の工夫を検討し授業を実践した結果、自分たちが調べたことや考えたことをわかりやすく伝えようとする態度を育成することができた。この結果から、メディア格差が大きくなっている学校現場において、学習環境を活かして子どものコミュニケーション能力を育成することの可能性について考察した。

キーワード：教育メディア、ICT、コミュニケーション能力、社会科、プレゼンテーション

1. 研究の背景

1. 1 コミュニケーション能力の育成

教職大学院で学ぶ中で、学部新卒院生や現職教員院生と議論をする機会が多くある。そうした議論や講義を受ける中で、これからの社会を生きていく子どもたちにはどのような力を育成する必要があるのか、ということを考える。文部科学省(2016)は、「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」で、子どもたちの現状と課題、2030年の社会と子どもたちの未来について述べている。子どもの貧困率の上昇、特別支援教育の対象となる子どもの増加、外国につながる子どもの増加など、一人ひとりの教育的ニーズは様々である。しかし、全ての子どもたちに、これからの社会を生きていくために必要な力を伸ばすことで自分の未来を切り開き、自立して生きて欲しい。そのために学校では、各教科において基礎的な知識や技能を習得することはもちろんであるが、それと同時に将来子どもたちが主体的に社会へ参画し、人々と共により良い未来を探究していくために必要な力を育成していく必要があると考えた。

では、具体的にどのような力を育成する必要があるのだろうか。まずは、子どもたちが生きていくこれからの社会について考えなければならない。文部科学省は、学校教育の将来像

を描くにあたっての1つの目標として、2030年頃の社会の在り方を見据えている。知識・情報・技術をめぐる変化の早さが加速度的となり、情報化やグローバル化といった社会的変化が、人間の予測を超えて進展するようになってきている。これからの社会は、変化の加速がさらに増し、「予測困難な時代」と言われている。より自由が認められ、新しい価値観やライフスタイルが生まれることにより、今までに経験したことのないような社会問題や人間関係の問題が起こるだろう。このような時代を生きていくためには、自分とは違う考えを持つ人とも人間関係を築き、共に問題を解決していきながら新しい社会を形成していく必要がある。未来の社会を担っていく子どもたちは、学校で仲間と共に学ぶことで、問題を解決できることや自分自身の考えが深まることを経験し、仲間とコミュニケーションを図りながら学ぶことの楽しさを実感することが、より大切になると考える。

教職大学院では、1回生と2回生で教職専門実習を行う。京都市立の小学校に実習生として受け入れていただき、授業実践や遊び等様々な場面で、子どもとたくさん関わることができた。1回生のときに行った教職専門実習Ⅰにおいて子どもたちと共に過ごす中で、一人ひとりの子どもたちが抱く「仲間と関わりたい」「自分の考えを伝えたい」という思いを引き出したいと考えた。特に、授業中に自分の意見が間違っているのではないかと不安でなかなか手を挙げることができない子どもや、仲間と上手く遊ぶことができない子どもには、コミュニケーションを図ることの楽しさを実感してほしいと思った。この気付きを研究テーマの設定につなげ、2回生で行う教職専門実習Ⅱにおける授業実践では、一人ひとりの子どもが持つ「自分の考えを伝えたい」という気持ちを引き出したいと考えた。

教職大学院での学びと教職専門実習での気付き、そして子どもたちが生きていくこれからの社会の展望から、仲間と積極的にコミュニケーションを図ろうとする力は、学校で育成したい力の1つだと考えた。このことから、研究テーマの軸を子どものコミュニケーション能力育成と設定した。とりわけ、本研究では、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を引き出すことを目指した。

1.2 教育メディア

メディアの進化は、人々のコミュニケーションをより自由にしてきた。その中でも、ICT(Information and Communication Technology)は様々な分野で注目されており、小学校にもICT機器が導入されている。平成23年から文部科学省は、学びのイノベーション事業の1つとして1人1台の情報端末・電子黒板・無線LAN等が整備された環境の下で、ICTを活用して子どもたちが主体的に学習する新しい学びを創造するための実証研究を実施し、「学びのイノベーション事業 実証研究報告書」をまとめた。これは、特定のモデル校で実施されたものであるが、この成果や報告を受けて、自治体単位でタブレット端末が一斉に導入されることなどを寺嶋ら(2016)

は予想している。文部科学省が平成 28 年度 10 月に発表した、平成 27 年度学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果を見ると、教育用コンピュータうちタブレット型コンピュータの導入台数が平成 26 年から約 2 年で 3 倍になっており、各自治体が学校へのタブレット端末導入を進めていることが分かる。しかし同調査結果の市町村別の報告を見ると、教育メディアの環境が変化する中で、地域や学校の格差も大きくなっていることが分かる。新しい時代のメディア開発が進められている現在、導入や活動を進めていくことだけではなく、改めて従来から学校にあるメディアを活かし、子どもの資質・能力を育成することについて考える必要があるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、子どものコミュニケーション能力の育成である。本研究では、とりわけ「伝えたい」という意欲を引き出し、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度に着目している。目的達成を図るために単元構成・授業方法の検討を行い、教職専門実習Ⅱにおいて実践した。実践した教科は、社会科である。学習内容について、子ども自身が様々な資料をもとに調べる過程の中で、自分の学んだことを伝えたいという思いが膨らむのではないかと考えた。授業方法は、電子黒板と黒板を併用した活用を検討した。多くの市町村で学校現場への電子黒板の導入が進んでいるが、先述したタブレット端末同様地域や学校間の格差はある。そこで、従来から学校にある視聴覚メディアに転用可能な方法を検討した。学習環境に左右されることなく、子どもの力を育成することを大切にしている。

3. 研究の手順

ここまでにおいて、大きく 2 つのことについて述べてきた。1 つ目は、これからの社会を生きる子どもたちには、自分とは違う価値観を持つ人とも人間関係を築き、共に様々な課題を解決していく力、つまりコミュニケーション能力が必要であることである。2 つ目は、近年小学校における ICT 機器導入推進と同時に地域間や学校間のメディア格差が大きくなっていることを受け、今ある学習環境を活かして子どもの力を育成するための授業づくりが大切であるということである。

目的達成を図るために、まずは単元構成・授業方法について検討を行った。そして、教職専門実習Ⅱにおいて授業を実践し、授業分析を行った。分析の方法は、授業観察と振り返り記述である。授業の最後は、必ず学習を振り返る時間を設定した。個人での振り返りは、授業の中で分かったことやもっと知りたいことをノートに記述させた。グループ活動を行ったときには、指導者が用意したプリントで活動の振り返りと自己評価を行った。プリントは、グループごとにファイルにまとめた。毎時間、同じ観点で振り返りや自己評価を行うことで、意欲や態度の変容を観察した。これらを「コミュニケーション能力(意欲・態度)」と「単元目標への到達度(理解)」という

視点から評価した。そして得られた結果から、子どもの積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を引き出すために検討した授業方法が有効であったかどうかを考察した。

4. 授業実践の概要と子どもの様子

4. 1 単元の概要

本単元は、「小学校学習指導要領解説 社会編」第5学年の目標(1)と(3)を受けて、内容(1)イについて扱った。人々が、国土の自然環境に適応しながら生活や産業を営んでいることや、国土の環境を守り健康な生活を維持・向上させていくために公害の防止に努めていること、国土の保全などのために森林資源の育成や保護、自然災害の防止に努めていることを手掛かりにして、国土の環境が人々の生活や産業と密接な関連をもっていることを考えることができるようになることを目指して設定された内容である。2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震とそれに伴った津波により多くの人の尊い命や日常が奪われ、日本中が自然災害の恐ろしさを目の当たりにし、改めて対策の重要性について考えさせられた。これからの社会を担う子どもが、自然環境と共に生きるということを考える学習内容は、とても大切である。本単元において取り上げる岐阜県海津市は、海拔0m以下の低い土地である。その土地に住む人々は、水害に悩まされながら工夫や努力によって、より良い暮らしを求めてきた。そこには、自然環境に適応しながら、その環境と共に力強く生きていこうとする人々の姿や思いがある。京都に住む子どもたちにとって馴染みのない岐阜県海津市も、同じ日本の中の1つの地域である。水害は、決して他人事ではない。海津市について各自調べたことや考えたことを伝え合う活動を行うことで、自分事としてとらえながら人々の思いや願いにせまっていけるよう指導を行った。

「低い土地の暮らし 岐阜県海津市」単元の目標

- ・地形条件から見て特色のある地域の人々の暮らしを、岐阜県海津市を例にして理解するとともに、自然条件と人々の暮らしや産業とのかかわりを考えようとする。
- ・岐阜県海津市の様子を概観し学習問題をつくり、低い土地の人々の暮らしや産業の特色を各種の資料を活用して調べてまとめるとともに、自然環境と人々の暮らしや産業のかかわりについて思考・判断したことを適切に表現する。

4. 2 授業方法と単元構成

次に、単元構成と授業方法について検討した。

海津市について様々な視点から調べ学習を行い、それを海津市プレゼンテーション大会という

形で伝え合う学習活動を盛り込んだ。プレゼンテーションは、2人から3人のチームで行い、1チーム約3分間で調べたことと考えたことを伝える。チームの中で役割分担を行い、必ず全員が伝えることに挑戦するよう指導した。一人ひとりの子どもが伝える立場を経験することが狙いである。自分の考えを伝えることに達成感を得ることで、コミュニケーションを図ることへの意欲を引き出すことができると考えた。

しかし、子どもたちにとってプレゼンテーションは初めての活動である。そこで活動の手立てとして、電子黒板と黒板を活用して手立てを講じることを検討した。まず、プレゼンテーションを行う際、電子黒板を活用しスライドを提示する。子ども自身が調べたことをまとめ、資料を使いながらスライドを作成することで学習内容を自分事として考えることができることである。次に、プレゼンテーションソフトを用いることでより良く伝える工夫を考えることができ、積極的にコミュニケーションを図る態度を育成できることが電子黒板を活用する目的である。

今回の授業実践のポイントとして、プレゼンテーション大会で伝え合ったことをどのようにまとめるかという点がある。伝え合ったことをまとめる手段として、黒板を活用した。黒板は従来から学校にある教育メディアの1つである。ノートやタブレットを活用し、一人ひとりの子どもが仲間のプレゼンテーションから受け取ったことをまとめるという方法もあるが、これでは「聴く姿勢」を育成することができないのではないだろうか。子どもたちが安心して伝え合う環境を作ることができないと考えた。先ほども述べた通り、今回のプレゼンテーションは子どもたちにとって初めての挑戦である。話を聞きながらメモをとることも大切ではあるが、まずは話している相手を見て良さに気付く姿勢を育成することが必要なのではないだろうか。黒板に伝え合ったことをまとめることで、「聞くこと」と「書くこと」を分けて行うことができる。また、黒板は子どもの言葉を残し、授業中であればいつでも振り返ることができる。つまり、黒板を活用することで、子どもの聞く姿勢を育成することができ、伝え合ったことを目で見えて振り返ることができると考えた。海津市プレゼンテーション大会では、板書係の子どもたちに黒板に伝え合ったことをまとめるように指導した。

第5学年社会科「低い土地の暮らし 岐阜県海津市」全10時間 単元構成

学習過程	・子どもの活動	◇コミュニケーション能力育成の視点
学習問題をつかむ 2/10時間	・ 海津市の写真を見て、気付いたことを話し合う。 ・ 低い土地である海津市への疑問をふせんに書き、班でグルーピングしたものを学級全体で伝え合う。 ・ 単元の学習問題を立てる。	◇班で行った海津市への疑問のグルーピングを学級で伝え合う際、より良い伝え方について考えさせる。 ◇子どもたちが立てた学習問題を黒板に図として表し、どのような学習方法で問題解決に迫るのかを話し合わせる。

	・ 学習問題を解決するために学習計画を立てる。 ・ プレゼンテーションという発表方法を知る。	◇指導者が、「海津市の郷土料理」というタイトルでプレゼンテーションを行い、伝え合う方法を知らせる。
調べる まとめる 6/10 時間	・ 学校のパソコン室と図書室でチームごとに調べ学習を進める。 ・ 調べたことをノートにまとめ、みんなに伝えたい知識や思いを考える。 ・ 調べたことや考えたことを、プレゼンテーションソフトのスライドにまとめる。 ・ より良い海津市プレゼンテーション大会にするために、意識したいことを話し合う。 ・ チームごとにプレゼン練習やスライドの再構成を行う。	◇「プレゼンテーションとは何か」という発問から、伝え合う活動で大切にしたいことを話し合わせ、学級の「合言葉」を作る。 ◇プレゼン練習を見てアドバイスをしたり、子ども一人ひとりの振り返り記述にコメントを記入したりして、自信を持って伝えることができるように支援する。
伝え合う 学習問題に迫る 2/10 時間	・ 海津市プレゼンテーション大会を開催し、チームで調べたことや考えたことを伝え合う。 ・ 伝え合ったことをもとに、海津市に住む人々の思いを考え学習問題の解決に迫る。	◇学習問題を黒板に図として表し、伝え合ったことをまとめ、全体で振り返ることができるよう板書計画を立てる。

4. 3 授業実践と子どもの様子

第5学年 社会科―「低い土地の暮らし 岐阜県海津市」(全 10 時間)

研究の対象は、教職専門実習の実習先である京都市立 A 小学校第 5 学年 1 組 2 組の子どもたちである。単元の学習過程を(1)学習問題をつかむ(2)調べる・まとめる(3)伝え合う・学習問題に迫る、の 3 つの過程に分け、各過程における授業展開の工夫と子どもの様子について、ここでは「コミュニケーション能力育成の視点」と「メディア活用」に焦点を絞って述べることとする。

(1) 学習問題をつかむ(2/10 時間)

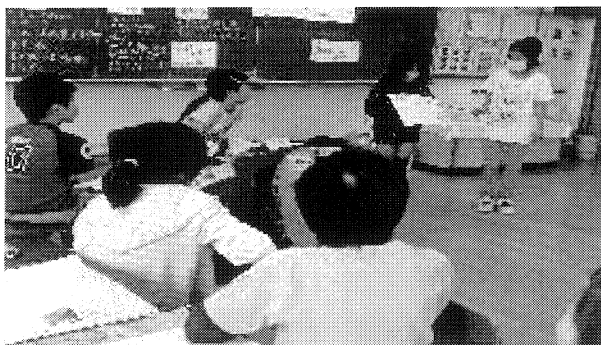
学習問題をつかむ(2/10 時間)では、海拔 0 メートル地帯の海津市輪中地区についての疑問を学級で伝え合い、単元の学習問題と学習計画を立てた

まず、指導者が提示した 3 つの写真を見て、子どもたちは「3 本の川の真ん中に島のようなものがある」「家が川よりも低い位置にある」「水や川に関する施設がたくさんある」ということに気付いており、岐阜県海津市輪中地区は日本有数の海拔 0 メートル地帯であるということを知った。子どもたちは、自分たちが住んでいる地域では見ることができない土地の様子から、「雨が降って川が溢れたらどうするのだろう」等の疑問を抱いた。この疑問を各自ふせんに記述し、班で

班で行ったグルーピングを学級全体で伝え合い、学級の中で多く挙げた言葉を海津市の疑問キーワードとして取り上げ、学習問題の設定につなげた。例えば、5年1組では、「水害」「環境」「くらし」「地域の発展・施設」というキーワードから、「岐阜県地海津市の土地の様子や、環境、くらしや地域の施設について調べたことや考えたことを伝え合い、海津市に住む人々の思いに迫ろう」という学習問題を設定した。この学習問題から、板書計画を立てた(図1)。これ

[illegible]

コミュニケーション能力育成のため、学級での伝え合いの際、「より良い伝え合いのためにはどのようにすべきか」を考えさせる指導を行った。指導者の発表を見た子どもたちは、聞き手側の視点から 〇教室で聞こえやすい声の大きさ 〇話している部分が分かるように示す方法 〇わかりやすい説明の順序に気付き、その気付きを自分たちの発表に活かしていた(図2)。



–216–

(2) 調べる・まとめる(6/10 時間)

調べる・まとめる(6/10 時間)の学習過程は、学校にあるコンピュータ室と図書室でチームに分かれて活動した。各チーム、自分たちのテーマについてインターネットや図書室の資料、教科書・資料集で調べ、プレゼンテーションの内容を考えた。インターネットの活用について指導すると、子どもたちは参考動画を見ながらメモをとる姿や、インターネットと本を使い分けて調べ学習を進める姿が見られた。3 時間目には、スライド作成の指導を行った。子どもたちが活動の中でいつでも参考にできるように、チームごとにファイルを作り配布した資料をまとめた。

また、より良いプレゼンテーションを行うために意識したいことを話し合う時間を設けた。話し合いの中で「プレゼンテーションは、思いを伝え、届けること」「自分たちが調べたことや考えたことを理解してもらうことが大切」という発言があった。また、プレゼンターの姿勢として「堂々と自信を持って前に立つこと」「ジェスチャーをつけること」「間を大切に話すこと」が挙げられた。目指すプレゼンテーションを一人ひとり明確に持ち、リハーサルをして指導者にアドバイスを求める姿や、休み時間にも活動をすすめている姿が見られた。

(3) 伝え合う・学習問題に迫る(2/10 時間)

伝え合う・学習問題に迫る(2/10 時間)学習過程では、9 時間目に海津市プレゼンテーション大会を開催し、10 時間目に伝え合ったことを元に海津市に住む人々の思いを考え学習問題に迫った。

海津市プレゼンテーション大会は、プログラムの作成・司会進行・板書まで役割分担を決めて、子どもたちが中心となって大会が進められた。プレゼンテーションを始める前に、今までの学習を電子黒板や自分たちが作ったグループボードを見て振り返った。また、学級で「より良いプレゼンテーションを行うために意識したいこと」を話し合った際の言葉を元に、海津市プレゼンテーション大会の合言葉を確認した。5 年 1 組の合言葉は、「堂々と自信を持って・あたたかい目で・他のチームの良いところを」である。子どもたちは、緊張している様子だったが、チームで力を合わせて力を発揮することができた。プレゼンテーションを聞いている子どもも、スライドを見ながらしっかり話を聞いて、プレゼンテーションが終わると拍手をして仲間を応援している様子が見られた。

学習問題に迫るため、指導者は「海津市の人々にとって、水や川はどのような存在なのだろう」という主発問を軸に、板書係がまとめた黒板でプレゼンテーション大会を振り返りながら授業を展開した。授業の最後には、単元の学習の振り返りとプレゼンテーションについての振り返りを記述するよう指示した。また、指導者の評価を伝え、今回の挑戦と努力を称えた。

5. 結果と考察

(1) 観察/作成したスライド/ノート/プリントにおける「コミュニケーション能力(意欲・態度)」

まず、「コミュニケーション能力(意欲・態度)」に関して述べる。ここでは、授業中の子どもに対する観察と振り返り記述から伺える、コミュニケーションを図ることに対する意欲の高まりを示す。

図3は、海津市プレゼンテーション大会で、作成したスライドを提示しながらプレゼンテーションに挑戦する子どもの様子である。この様子から、単元を通して気付いたより良い伝え方を活かして、自分たちの調べたことや考えをみんなに伝えようとするコミュニケーションを図ることに対する主体的な態度が見られた。



図3 プレゼンテーションに挑戦する姿

実際に子どもが作成したスライドには、調べたことや考えたことをただ書くだけではなく、ポイントだけを書くことや図を使って説明するなどの工夫が見られた。指導者の配布した資料やアドバイスを参考にし、練習を繰り返しながら試行錯誤して積極的に活動していた。プレゼンテーション大会を終えた子どもの振り返り記述には、授業実践は2クラスで行ったが、その多くの子どもが「またプレゼンテーションをやりたい」という記述をしていた。

海津市プレゼンテーション大会で見られた子どものコミュニケーションを図ることに対する主体的な態度は、プレゼンテーション大会という伝え合う場を設定したこと、そして単元を通してコミュニケーション能力育成を軸に授業を展開したことにより育成されたものであると考えられる。学習問題をつかむ学習過程から、より良く伝える方法についてグループボード(画用紙)を使いながら実践的に指導を行ったことや、プレゼンテーションについて学級で話し合いを行ったことにより、海津市プレゼンテーション大会で子どもたちに達成感を与えることができた。また、プレゼンテーションソフトを用いたことで写真や図などを工夫することができ、子どもの意欲を引き出すことができた。これらの成果は、先述した子どもに対する観察と振り返り記述から捉えることができる。

また、子どもの振り返り記述に、「緊張したけれど、頷きながら聞いてくれていたことがうれしかった」とあるように、全体場で発表することが苦手な子どもにとって、友だちがしっかりと聞いてくれていてということは安心できる環境である。今回は黒板を活用したことで、子ども

は聞くことに集中することができ、発表することが苦手な子どももプレゼンテーションに挑戦することができた。タブレット端末を活用することで、子ども自身が手元で操作できることが可能になり、意見の共有やまとめが効率よく行えるようになるだろう。しかし、手元で何か操作をしながら人の話を聞くということは難しく、また話している子どもの立場に立って考えると、そのような環境は決して話しやすい環境とは言えないのではないかと考える。特に、小学校段階でコミュニケーションを図る意欲を引き出すための指導においては、黒板による共有が有効であると考えている。

(2)観察/ノートにおける「単元目標の到達」

次に、「単元目標の到達」について述べる。本研究では、コミュニケーション能力育成、とりわけ「伝える」ことへの意欲・態度を軸に授業実践を行った。しかし、教科指導であることから、これらの学習活動が教科や単元の目標に到達するために有効であったかを検討する必要がある。ここでは、授業中の子どもに対する観察と振り返り記述から伺える、単元目標への到達度を示す。

10 時間目に「海津市に住む人々にとって、水や川はどのような存在なのだろうか」という主発問から授業を展開した。過去の洪水の記録を写真や新聞記事を提示し、その恐ろしさについて報告したチームや、水害対策について紹介したチームのプレゼンテーションを受けて、「海津市の人は、水害を恐れている。水は、怖い存在」と発言した子どもがいた。一方で、海津市の水を活かした施設を「みんなが行ってみたいと思うようなプレゼンテーションにしたい」という思いで紹介したチームや、美しい水を守るために取り組まれている森林保護の活動について報告したチームのプレゼンテーションを受けて、「水や川は、海津市にとって大切なもの」と答える子どもも多かった。日本有数の海拔 0 メートル地帯である海津市輪中地区に住む人々は、長く水害に悩み、様々な工夫を講じてきた。子どもたちは、そのような人々の苦勞と努力だけではなく、地域の自然環境を大切にする思いにも気付くことができた。

この気付きに迫ることができた理由として、様々な視点からの伝え合い活動と、それを可視化することができる板書計画が考えられる。低い土地のくらし 岐阜県海津市の学習の中で、水害や水害対策は、とても大切なポイントである。しかし、「海津市には水を活かした施設がたくさんある」ということに気付かせることで、より深い学びにつながると考えた。単元を見通して板書計画を行ったこと、黒板に大きくまとめられた図を使って振り返りを行ったことにより、子どもたちの素晴らしい気付きにつなげることができた。

7. 研究の課題と今後について

本研究の課題は、2 点ある。まず 1 点目は、授業実践における単元構成である。今回の実践では、調べる・まとめる学習過程を 6 時間に設定した。今までに調べ学習を経験したことのある子

どもたちであったが、経験したことのある子どもたちがいる一方で調べるのが苦手な子どもや、家庭のインターネット環境に差があることからインターネットを用いた検索方法や図書を活用することなどの指導を行った。また、スライドの作成にも時間をかけた。今回、子どもたちにとって初めてのプレゼンテーションソフトを用いた発表活動だったので丁寧な指導が必要だと判断し実践したが、このような指導を社会科の1単元だけで行うことは難しい。各教科の活動とつながりを持たせた横断的指導、また小学校6年間を見通した指導が大切である。今後、学校現場へのICT機器導入が進むことで、子ども自身がメディアを活用しながら学習する機会が増える。メディア活用について、どのように時間を確保し指導していくかを考えていきたい。

2点目は、子どもたちの意欲・態度を評価し、客観的に実践を分析することである。本研究では、授業観察と子どもの振り返り記述からコミュニケーションを図ることへの意欲とメディア活用について検討した。今後は自分自身の授業実践について、より客観的な視点から分析し考察していきたい。

本研究では、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成、つまり子どもの意欲を引き出すことを目指した。学校メディアを活用することで、一人ひとりの子どもが安心して伝え合う活動に挑戦できる環境を整備することができた。今後は、この意欲や態度を基に、実践的なコミュニケーションを図るスキルを育成していくためのメディア活用について研究し、実践していこうと思う。学習活動を通して、子ども一人ひとりに仲間と共に学ぶことの楽しさを実感させ、将来より良い人間関係を築きたくましく生きる力を育成していきたい。

〈参考文献・資料〉

- (1) 斎藤孝, 2004, 『コミュニケーション力』, 岩波書店
- (2) 寺本潔編, 2009, 『言語力で育つ社会科授業—対話から討論まで—』, 教育出版
- (3) M. マクルーハン, 1987, 『メディア論』, みすず書房
- (4) 文部科学省, 2008, 『小学校学習指導要領解説 社会科編』, 東洋館出版
- (5) 文部科学省中央教育審議会, 2016, 「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ(報告)」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/1377051.htm
[2017年2月6日確認]
- (6) 文部科学省, 2016, 「学びのイノベーション事業」
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/04/1346534.htm
[2017年2月6日確認]
- (7) 文部科学省, 2016, 「平成27年度学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/1376689.htm

[2017年2月6日確認]

- (8) 黒上晴夫, 2016, 「変わりゆく教育状況とメディア研究」, 日本教育メディア学会第23回年次大会研究発表収録, p82-83
- (9) 寺嶋浩介, 中川一史, 村井万寿夫, 小林祐紀, 2016, 「1人1台タブレット端末の利用実態の変化ー市全体の小・中学校に導入した自治体を対象としてー」, 日本教育メディア学会第23回年次大会研究発表収録, p96-99